

Title	静岡県駿東郡長泉村の古墳と遺物
Sub Title	
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.19, No.4 (1941. 3) ,p.117(701)- 126(710)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410300-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

静岡縣駿東郡長泉村の古墳と遺物

清 水 潤 三

本年四月米山梅吉氏の御好意により、三田史學會員有志は静岡縣駿東郡長泉村下土狩の同氏別邸内にある二基の古墳を視察することを得、且つ本塾考古室に附近の古墳より出土せる遺物の寄贈を受けた。筆者もその行に参加し、實測の事に當つたので、此處に簡単に報告を試みたいと思ふ。

一

今回視察した古墳の所在地たる長泉村一帯の地は愛鷹山裾野の東南端に位置し、緩傾斜を呈する平地であつて、北方より來る黄瀬川がその西端を貫流して居り、北に富士山、東に箱根の山々が聳

え、南方には三島の盆地が開けて、頗る形勝の地を占めて居る。かゝる地勢よりして、古くから人々の居住地となつたものと見え、諸所に石器時代遺蹟が散在し、同時に古墳も頗る多く、その内破壊されたるものも相當數に上るらしいが、尙所々に壘々として殘存し、著しい古墳群を形成して居る。

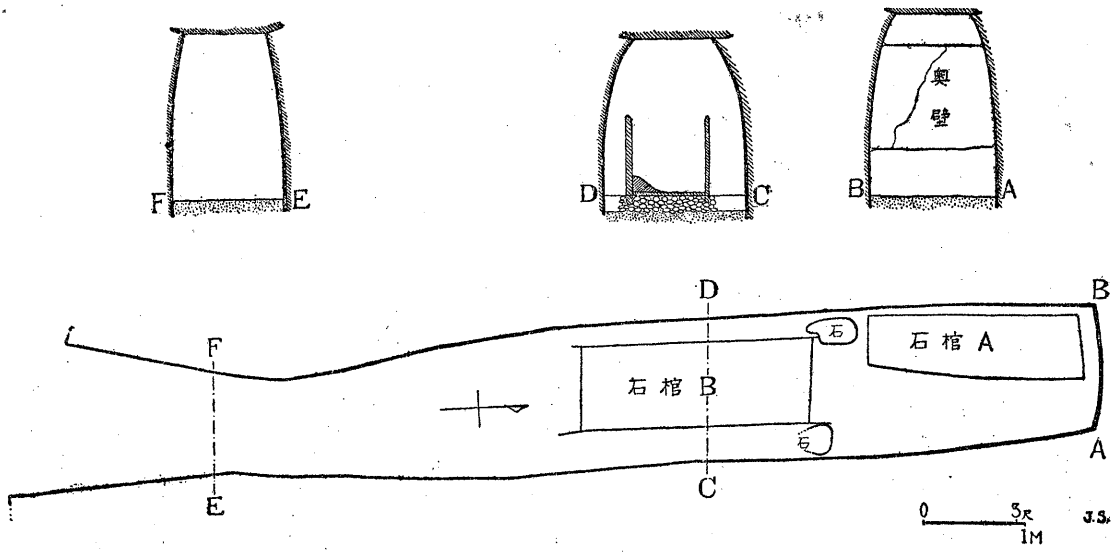
これ等の古墳に就いては既に静岡縣史蹟名勝天然紀念物調査委員清水吉彦氏による報告があり、パンフレットにもなつて居るが、極めて簡略であり、且つ入手困難と思はれるので、かさねて右の小冊子によつて略述すれば、この附近の古墳は概ね小形の圓墳で高さ十尺を超えるものは稀であり、

前方後圓墳は一基も發見されて居らない。殆んど例外なく附近に豊富に埋没して居る熔岩を利用して築造したる石室を有し、石棺を有するものが多く、石棺には黄瀬川の支流、桃澤川中流に産する折枝石と稱する板狀石が主として用ひられてゐる。又石室中心線が南北に通る點が共通して居り、興味ある特徴として擧げられる。

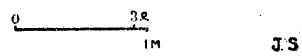
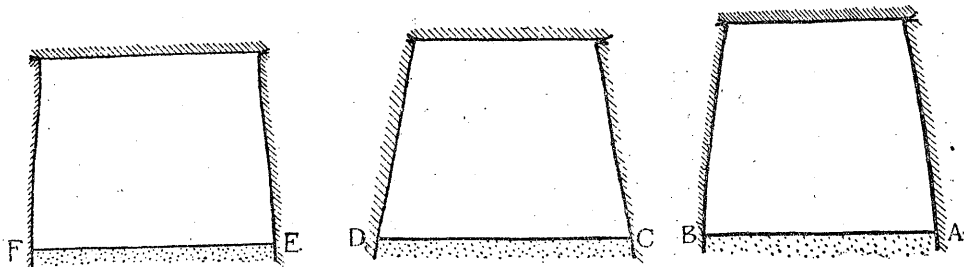
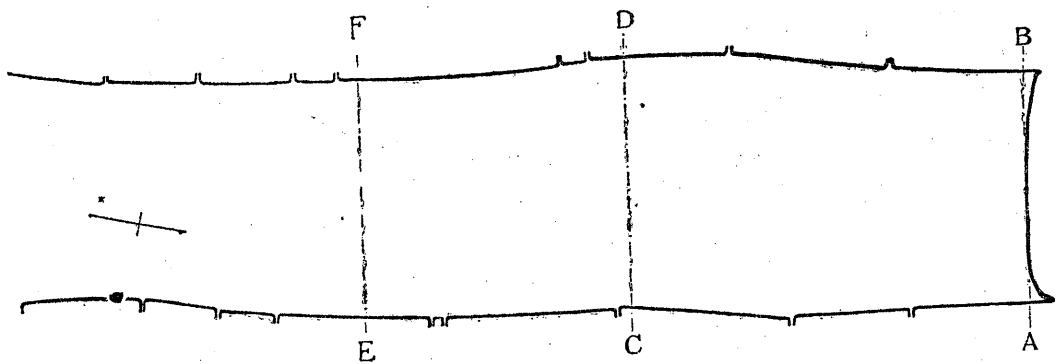
出土品には特筆に價するものは少いが、清水吉彦氏の報告された大字中土狩字山ノ神道古墳より發見された刳拔家形石棺、銅銃、金銅製板狀裝飾品殘缺、下土狩二ツ塚出土の勾玉狀金銅製品、二ツ塚附近の一古墳出土の刳拔石棺、今回米山氏によつて本塾考古室に寄贈された蜻蛉玉等が注目され、同時に從來知られた所では金、銀環が必ず石棺外より出土する事實は注意を惹く。

さて今回實見し得た二基の古墳中、第一號墳と假稱するものは、御殿場線下土狩驛の東方約一町を距つた米山梅吉氏別邸内東南隅にあり、俗に五百塚と呼ばれる古墳群に屬する。現在庭園の一部となれる爲、上部を削平され、裾部にも若干の破壊を蒙つて居り、舊形を損じてゐるが現存部の徑六十尺、高さ六尺を計る小圓墳である。内部に石室並びに石棺二個を有して居るが、埴輪、葺石、涅等の痕跡は全く認められない。

石室は南方に開口し、羨門附近を一部破壊されて居る外完存する。實測圖に見る如く、中縊れの頗る狹長な平面を有し、玄室と羨道との明確な區劃を有せず、側壁を熔岩塊によつて築成し、奥壁に三個、天井に九個の巨大な岩石を利用して居る。實測圖に見る如く、側壁の斷面が緩かな曲線を畫いてゐるのは注目に價する。全長卅四尺、幅員は最大四尺六寸、最狹部で三尺を計り、高さは五尺



下土狩第一號墳石室測圖



下土狩第二號墳石室測圖

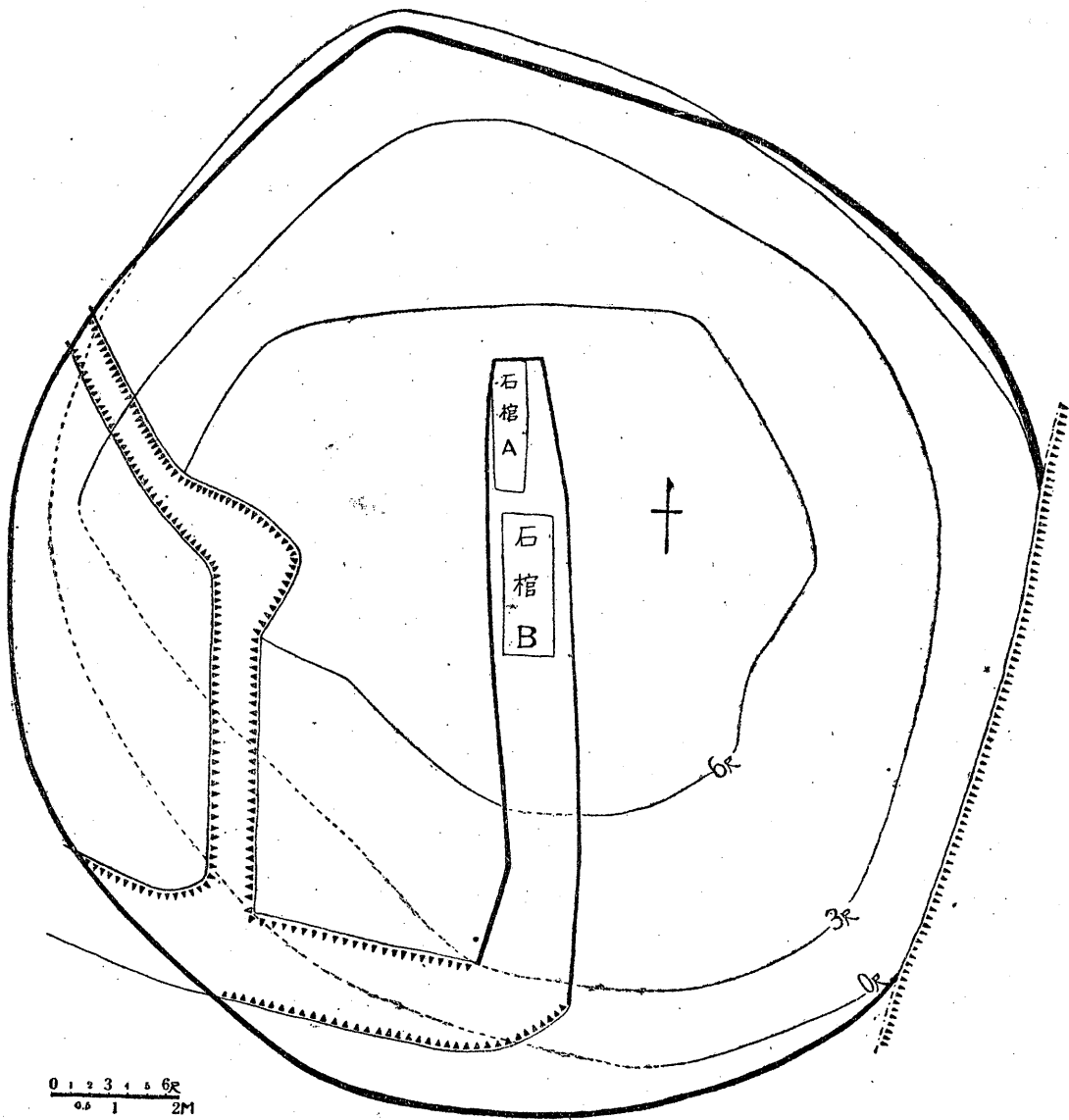


圖 測 實 墳 號 一 號 狩 土 下

前後である。床面、天井石の
 下面は共に略、同一平面にあ
 つて傾斜を有せず、中心線は
 北より約一度西偏し、附近古
 墳の通有性に従つて居る。石
 室内には最奥、西壁に接して
 一個、中央稍北寄り東壁に接
 して一個、合せて二個の石棺
 が存してゐた。

石棺は二個共に俗に折枝石
 と稱する板状石にて作られた
 極めて簡単な箱型組合石棺で
 ある。

A 號石棺 (最奥にありし
 もの)

長さ約七尺、巾二尺、高さ
 二尺。側石は兩側共三枚、底

石は一枚の折枝石より成り、蓋石は失はれて小破片を残すに過ぎない。棺下は約二寸の土層を隔て、地固めを施した古墳基盤に達する。

B 號石棺（中央部にありしもの）

稍、大形で長さ七尺三寸、巾二尺七寸、高さ二尺五寸前後を計り、六枚の大石を用ひて作られたらしいが、北方側石は破壊され蓋石も亦數個に破損し、石室東壁との極めて狭い間隙に顛落して居る。此の石棺に在つては前者と異つて、底石の下部に厚さ約五寸に互つて川原石を敷き詰めた基礎工作を施して居り、なほ側石の支へと見られる石材が數個残存して居る。用材の折枝石もA號に比して厚く頑丈である。

遺物は少量の人骨を石棺内より見出した、と傳へるのみで、全く存在せざりしもの、如く、A號石棺の蓋石が完全に破壊されて居り、B號石棺のそれが恰も迂り落した如く見える點をも考へ併せ

て本古墳が早く盜掘の厄に遇つたことを想像せしめる。

三

米山氏別邸の西隅に當り、第一號墳の西方約三十間を距て、假稱第二號墳がある。これ又五百塚古墳群に屬し、殆んど同大の圓墳で庭園の築山に利用された爲、多く原形を損じて居るが、内部に南方に開口する石室を残存して居る。現在では石棺を存して居らず、嘗て存在せしや否やも明かでないのは遺憾である。

此の古墳の石室も第一號墳と全く同一の構築法によつて居り、方位その他も近似して、附近通有の特色を有して居るが、前者に比して稍、規模雄大であり、平面が長方形に近い點が相違して居る。石室全長は現存部に於て二十五尺五寸、幅六尺、高さ約五尺を計るが、石室の南端は築山に利用す

る際大分變形されたりしく、土地の人々の言によれば現在より三・四尺長かりしもの、如くであるが、玄室に對して特に羨道部として區別さるべき部分は存しなかつたらしい。よつて營造當初の石室全長は廿八・九尺のものであつたらうと思はれる。なほ本古墳石室にあつては、側壁斷面が直線をなして居り、第一號墳のそれが曲線をなすのと著しく相違してゐる。

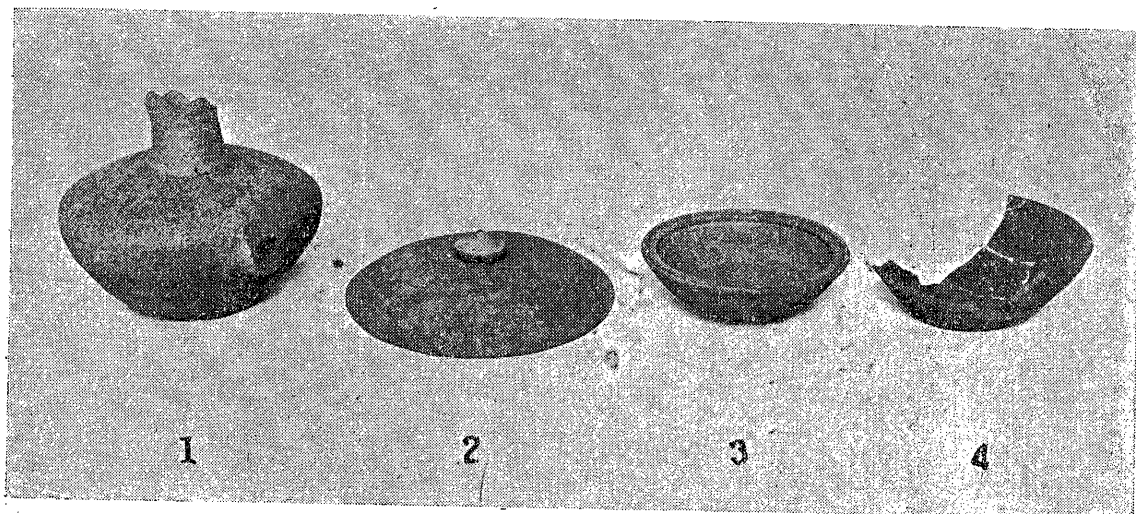
出土遺物は全く失はれて居り、如何なるものが存したか知ることが出来ない。

四

今回米山梅吉氏より本塾考古室に寄贈された遺物類は次の如くである。但し不幸にして悉くその出土地を明かになし得ない。

(1) 須惠器三個

完全品は一個もなく、全部製作稍、粗雑であ



第一圖 米山梅吉氏寄贈土器類

る。

(一) 甗ハサフ 一個

頸部の半ば以上を缺失して居る。現在部の高さ三寸七分、徑四寸、灰白色を呈し、一部に吹出袖の現れて居る部分がある。無文の粗製品で、圓孔は先端を破損して居るが稍、突出して居たもの、如くである。

(第一圖1)

(二) 蓋付坏 一個

蓋のみ残存して坏身を缺いて居るのは惜しい。蓋は徑四寸四分、灰白色で、側面觀による背面曲線に角が立つてゐる點、鈕の形狀が複雑となつて居る點等から、時代の稍、降るものと見られる。

(第一圖2)

(三) 蓋付盃 一個

蓋を失つて居る。徑三寸三分五厘、前二者に比して黝黑色を呈する外、何等記すべき特徴を有しない。(第一圖3)

(2) 土師器一個

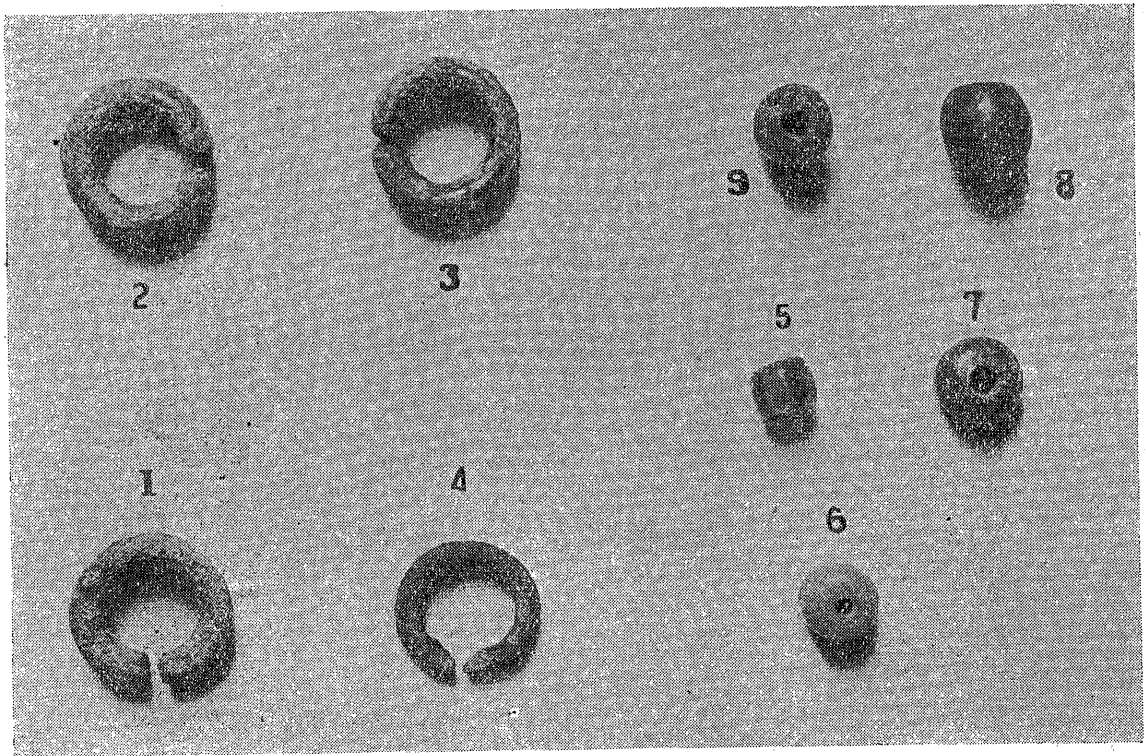
(一) 碗 一個

高さ一寸三分、徑四寸三分、轆轤を使用して製作されたと思はれる。内面に篋磨きによつて放射線を畫いて居る。(第一圖4)

(3) 金銅環三個

(一) 外徑六分、身の断面は角のとれた矩形を呈し、

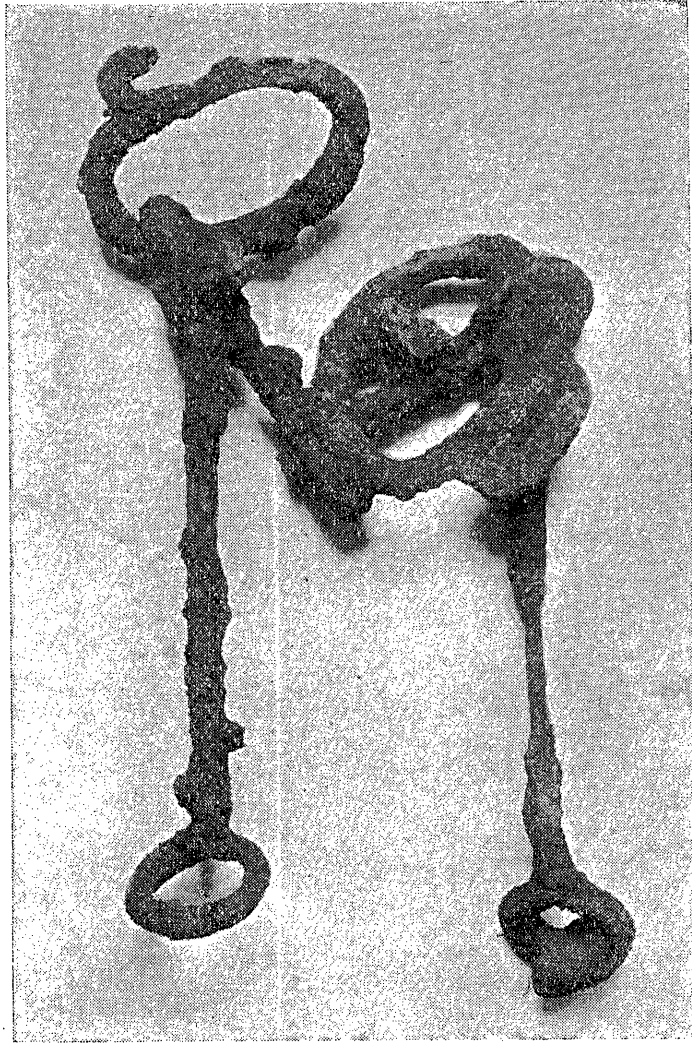
静岡縣駿東郡長泉村の古墳と遺物(清水)



第二圖 米山梅吉氏寄贈金銅環並玉類

長徑二分を計る。一部僅かに金色の部を残す外青
銹に覆れて居る。(第二圖1)

(二)(三)外徑六分五厘、身の断面は(一)と同じく角の
とれた矩形で長徑二分を計り、二個共殆んど同巧
同大にて、一對をなせしものと思はれる。金色を
呈する部分多く、鮮かな青銹と相俟つて頗る美し



第三圖 米山梅吉氏寄贈鑰

い。(第二圖2、3)
(4)銅鑲一個

外徑五分五厘、断面圓形にて徑一分を計る小形
品で黒味が、つた銹に覆れて居る。(第二圖4)

清水吉彦氏によれば、長泉村にて従來出土した
金銅鑲は相當數に上り、悉く石棺外より發見され
ると云ふが、此の四個の出土位置が全
く不明なのは甚だ遺憾である。

(5)小玉三個

三個共にガラス製である。

(一)高さ、徑共に二分五厘、孔の大
なるが目立つ。藍色の鮮かな色彩を有す
る。(第二圖5)

(二)高さ二分五厘、徑三分、空色を呈
し、上下兩面は平に削られて居る。

(第二圖6)

(三)高さ二分五厘、徑三分五厘、(二)よ

り更に扁平で、色調は緑が、つた藍色である。(第二圖7)

(6)蜻蛉玉二個

(一)高さ四分、徑三分五厘、上下兩面を平に削つてある。濃藍色で三個の黄色斑點を有する。(第二圖8)

(二)高さ三分五厘、徑三分、(一)より稍、小形であり、胴の膨みも前者の大なるに比して著しく少い。色調は同一であるが、一部破損して居り、現在では黄色斑點二個を有して居る。(第二圖9)

(一)(二)共に質は精良とは云ひ難いが、一般に比較的發見例に乏しいもの故、貴重な資料である。この點、長泉村附近の古文化を考察する上にも重要な意義を有するものであらう。

(7)轡 一具

鐵製で鏡板等にも何等の裝飾を有しない。保存状態不良で各部相銹着して居り、金具の破損して

遊離したものが數個附屬してゐる。

他に寄贈品として、銅製刀鞘鑑金物一、責金具一、刀劍木質部殘片一、(目釘穴と覺しきものあり)(以上一括) 皇宋通寶一、鋤一、鍋一、刀子形鐵製品一、があるが、古墳遺物とは無關係と思はれるので記述を省略する。

五

以上今回實見せる古墳並びに米山氏寄贈遺物に就き、極めて簡単に紹介を試みたのであるが、この長泉村は冒頭に觸れた如く、その地形よりして遠く石器時代人の居住地となり、古墳時代に入つては後世の東海道に近く、一の地方的文化を保持したのであつた。その所産たる夥しき古墳は時に注目すべき遺物を出し、石室構造に關しても興味ある資料を提供して居る。淺學なる筆者は、到底十分なる考察をこれに加へ得ないが、この小稿を

機として、從來さして注意を拂はれなかつた此の地方に、學術的調査の手が一日も早く伸ばされんことを祈つて止まないものである。終りに臨み、米山梅吉氏の御好意に對し、謹んで感謝の意を表する次第である。

追記 三田史學科より此調査旅行に参加したのは柴田常惠、間崎万里、松本信廣、今宮新、保坂三郎、淺村一郎の諸氏並びに筆者であり、本旅行の費用は昭和十三年度本學部出身永野浩三君の寄附によるものなることを附記する。